



学内広報

No.1321

2005.10.12
東京大学広報委員会



安政江戸大地震の被害を物語る図巻・島津家文書・国宝、(史料編纂所所蔵)(14ページに関連記事)

CONTENTS

一般ニュース	2	イオニュースとペプロフォロスー東京大学ソクマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査の一成果』展、SciFinder Scholarユーザトレーニングのお知らせ、データベース定期講習会のお知らせ
役員の就任、事務職員海外研修報告		
部局ニュース	8	事務連絡 人事異動(教員)
中山成彬文部科学大臣、スーパーカミオカンデを視察		
掲示板	9	EVENT INFO
ホームカミングデイ開催迫る!、スポーツ大会・講習会のお知らせ、「楽しむ科学コンクール」の創設、「教養学部報」第486(10月12日)号の発行、「form_raum_ideeーデッサウのパウハウスとハレのブルク・ギービヒェンシュタイン美術デザイン大学、世界の現代デザインを切り開いた二つの美学校ー」開催、史料展示会「東京大学の国宝・重文名品展」開催、公開講座「標本は語るー自然の体系を目指して」開催、特別展示『デ		17
		19
		20
		コラム
		Flags運動部紹介No.1
		コミュニケーションセンターだよりNo.5
		理学部1号館にコーヒーショップがオープン!
		附属中等教育学校で銀杏祭開催
		7
		9
		13
		18

■ 役員の就任

平成17年10月1日付で役員の就任がありましたので、以下のとおりご紹介します。

理事（非常勤）

山田 興一 担当：総合企画



昭和59年7月 住友アルミ製錬(株) 無機材料研究所 主席研究員

平成元年3月 住友化学工業(株)筑波研究所 主席研究員

平成3年4月 東京大学工学部寄附講座教員(客員教授)

平成8年9月 東京大学大学院工学系研究科教授

平成11年4月 信州大学繊維学部教授

現在

(財)地球環境技術研究機構理事・研究所所長代行、成蹊大学特別研究招聘教授

研究協力部

事務職員海外研修報告

本学では、国際交流に熱意のある事務職員を長期間海外に派遣する研修制度を実施しています。このたび平成16年～17年にかけて派遣した者の報告書が提出されたので、供覧します。

アメリカでの長期海外研修を終えて

研究協力部国際課研究活動支援チーム
飯塚祐二

私は平成16年3月26日から平成17年3月25日にかけて、米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校（UCSB）にて長期海外研修（語学・インターンシップ）を行った。以下その報告である。

（語学研修1期目・2期目・3期目）

私の研修はカリフォルニア大学サンタバーバラ校附属のエクステンション（UCSB Extension）での語学研修（2期受講）から始まった。初日にミンガンテスト（TOEFLの簡易版）・インタビューによるレベルチェックがあり、クラスが決定された。クラスはCore Class、Elective Class（2科目を選択）から構成される。授業

の内容としては新聞・雑誌の記事やポップソング、ビデオクリップ、映画等を使用した会話中心のクラスである。クラスの人数は10名前後で、その中でペアを作って会話をしたり、あるいは個人やグループでプレゼンテーションをしたりといった内容である。私はどちらかということや会話が不得意であったので、いきなりアメリカ人の学生と会話するよりも間違いをすることが当たり前の、英語を母国語としない学生たちとの会話練習から始められたのは大きい。

語学研修の3期目よりDYO（Design Your Own）プログラムを受講した。このプログラムは語学学校の授業を含め、UCSBの授業、社会人向け（夜間）のプログラムから自由に選んで受講できるというものである。私はUCSBから2コマ（Global Studies 1とReligious Studies80A）、と夜間の社会人向け講座からProject Management 2コマを受講した。

アメリカの大学は日本と違う点が見つかる。1つは課題の多さである。授業初めに配布されるシラバスには授業各回に指定された課題が示されている。1コマでテキストは大体300ページ～500ページのもの（様々な文献からのコピーを集めた冊子）を2、3冊という形であったが、授業によっては5冊という授業もあるようである。授業は教授による講義とTAによるディスカッショングループから構成というのが一般的であった。したがってクラスに登録するにはディスカッショングループに入ることが義務付けられており、人数の問題から人気のクラスに登録するためには「クラッシュ」と呼ばれる追加リストに名前を入れる方式をとらなければ登録ができないことがしばしばある。講義はパワーポイント、ビデオクリップ（インターネット含む）、スライド、OHP等を利用して行われる。

特に印象的だったのはGlobal Studies 1の授業である。この授業はGlobal Studiesの基礎の授業であり、世界史をGlobalizationの視点から学んでいくという内容であった。（理論面の展開はGlobal Studies 2で行われる。）講義は3人の教授・准教授が担当していた。このうちの1人Mark Juergensmeyerは宗教学の教授であり、イラク戦争や一連のテロについて発言をしている。UCSBでは誰もが知っている有名人らしく、テキストを買う際も「そのクラスは良いはずだ。」と言われた。彼の授業はジェスチャーを交えたユーモラスなものであった。彼の専門・興味関心からイラク問題や選挙といった時事問題に脱線することがしばしばあった。

とにかくリーディング課題の多さに圧倒された。最初は辞書を引きながらと思っていたが、毎回40ページから60ページの課題（授業は各週2回から3回にディスカッション1回がプラスされる）をこなしつつ、レポート・論文（8ページから10ページで参考文献3冊以上の本格

的なもの)を書き、夜間の授業に出るというローテーションからさすがにそれも諦めざるをえなくなった。授業がない時間と週末は全てリーディングに費やされた。学生ビザで来る場合12単位(4単位3コマ)が最低必要で、更に現地の学生が16~20単位をとっていることを考えると、彼らがどうやってアルバイトやサークル活動の時間を捻出しているのか、不思議に思えてならなかった。(実際インターンシップ先の学生は16~20単位とった上で働いているのである。)

クラスは大教室(映画館にも使われる)であっても、学生と講師の双方向で行われていた。授業の合間であっても、学生たちがその場で気づいた疑問点を出していた。また、講師も学生に対してリアクションや疑問を投げかけるといった場面が多く見られた。これは「何か質問はありますか?」という問いかけに対し、何も反応がないのが当たり前であった私の日本における大学生活とは全く違って、いかにもアメリカらしいと思った。だが、それとは逆にディスカッショングループにおいて学生たちがTAの挨拶に無反応、問いかけに対しても反応が鈍かった様子を見ると、それも一概には言えないのかも知れない。

(語学研修4期目・インターンシップ・Education Abroad Program(EAP)について)

語学研修4期目の開始とともにUCSBのEAPオフィスでのインターンシップを正式に開始した。EAPのオフィスには東京大学における本部に当たる、University Wide Office(UO、サンタバーバラ内にある)と、カリフォルニア大学各校内のCampus Officeから構成される。私はUCSBキャンパス内にあるCampus Officeでインターンシップに従事した。EAPとはカリフォルニア大学の公式な海外留学プログラムの1つであり、夏季・クォーター・セメスターあるいは年単位で学生が学び生活することができるシステムであり、毎年35を超える国々へ、700名を超える学生を送り出している。同時に協定校から本プログラムを利用して逆に留学生を受入れている。東京大学でも工学部とのみではあるが、本プログラムによるUCの学生の受け入れがある。かつてはAIKOMを利用した学生の受け入れもあったようだが、EAPを利用する学生の多くが、専門課程の3年生と4年生から構成されていることから、残念ながら専門課程の単位を取得したいUCの学生のニーズに合わず、現在このプログラムは閉じたとUOの日本プログラム担当(私のインターンシップのコーディネータでもあった。)Nicole LeBlanc氏は話していた。同氏はUCには工学部以外にも例えばUCSBには物理学で優秀な学生がいるので、受入れの閥を広げてほしいと要望を出されていた。また同氏は日本国籍を持つてはいるが、アメリカに長く

住んでいる学生を普通の留学生と同じ扱いにして欲しいと要望を出されていた。

UO作成の日本プログラムのレポートを見ると、アメリカ人学生は日本文化に関する関心、特に漫画やアニメ、テレビゲームに関する興味関心が強いらしく、実際日本行きプログラムの志望書を読んでそれを読み取ることもあった。オフィスの忙しさのピークは1月である。私のインターン正式開始も正にこの1月であった。秋に海外に行く学生の申請締め切りがある関係である。ピーク時には事務所に学生が入りきらず、廊下に学生が並ぶという状況であった。アメリカは自由そうなイメージがあるが、申請書類の多さは日本と同じかそれ以上である。申請書、成績、志望理由作文、教授の推薦文及び面接にて選考が行われた。ただ、これはプログラム、あるいはアドバイザーによってそれぞれやり方が異なっていた。プログラムによっては面接がグループになることもあるし、推薦文が求められないこともあった。私は主に今回のインターンシップ受入担当のErin McCartneyの元、中国・香港・シンガポール・フィリピン志望の学生の選考を手伝った。特に印象的だったのは面接である。学生への質問を考えるため、申請書を読み、CIAワールドレポート等を使ってリサーチをし、質問を考えた。本当にそのプログラムに参加したいかというのは面接をすれば明らかであった。Erinはその国の時事問題(政治・経済)を中心に質問をしていたが、“I don't know”という答えを臆面もなくしている学生たちに呆れることがしばしばあった。逆に志望が明瞭に読み取れる学生たちはこちらが質問する余地がないほど、立派なのでこちらが「もう質問する必要がない」と思って質問を手控えると、逆に「もっと質問はないのか?」と聞かれるくらいであった。

Erinの頭を悩ませていたのが、学生の枠の問題である。1つのプログラムの参加人数はUC各校の中で割り振られる。したがって中国や香港などの人気プログラムは募集人数に対して採用人数がその3分の1というケースがしばしばであった。それだけに志望動機がしっかりしている学生が、GPA(Grade Point Average)の基準を下回っている(ほとんどのプログラムが3.0以上を要求している。)という理由で、他の志望動機が明確でない学生たちを選ばざるを得ないケースがあり、何とも言えない気分になることがあった。

(Campus Officeの事務システム)

事務の煩雑さに関しては日本と変わらないと言って良い。EAPに参加するには学生は数多くの申請書類を出さなければならない。またプログラムを終えて帰ってきた段階でも単位互換の手続きのために書類の提出が必要となる。(EAPは自動的な単位互換システムにはなっていない。)

ただし、学生への対応という意味では、文化の違いからか、よりオープンな印象を受けた。各国向けの専任アドバイザーがAssociate Directorを含めて6人おり、ドロップ・イン・アワーなるものを設けて、学生たちのきめ細かな疑問点に答えるような体制をとっていた。また、学生アドバイザー（8人）を雇っているのも大きな特徴である。学生アドバイザーは10月から6月までの期間、電話による問い合わせや学生への簡単な質問への対応、その他雑多なアドバイザーたちの仕事の手伝いを担当していた。学生アドバイザー自身が前年度のプログラムを経験していることもあり、より学生側の視点に立った、あるいは学生たちが知りたいがるような情報を与えることができるようであった。この他にも（集まりが悪いようであったが）各国プログラムのオリエンテーションの際には、そのプログラムに実際行って来た学生を呼んで自分のプログラム体験について話してもらい、質問に答えてもらうということも行っていた。

インターンシップ先の事務室はフロント、アドバイザー用の個室と学生が自由に使える空間（PC・資料等）及び会議室から構成されている。アドバイザーの部屋へ学生が直接訪ねていくことはできないが、フロントで予約等ができるようになってきている。基本的な質問であれば、フロントの事務で十分対応可能であるし、また学生アドバイザーがフロント前に必ず1、2人いるので、常に対応できる形になっている。私が日本と大きく違っていたと思うのは、フロント以外では、カウンター越しに学生と事務が向き合うということがなかったということである。アドバイスは各アドバイザーの個室、あるいはフロント前のスペースで行われる。仕切りがないために両者がより空間的に近い関係でやり取りができるといった。そしてそれにより事務と学生という垣根をなくしていたように思う。

その他、受入れ学生向けにはBuddy Programという制度があった。受入学生とUCSBの学生（EAP経験者）をマッチングし、交流を図るといった制度である。双方に希望する相手（出身国、使用言語、性別など）を申請書に書いてもらうのだが、希望に偏りがあり、なかなか希望通りマッチングはできなかった感はあるし、他にも色々な問題点をはらんでいる。しかしまだ始まったばかりのこの制度は、私自身アメリカの大学の授業に出て、現地の学生と仲良くなるのが難しいと思っていただけに、やはり有意義なものだと思う。Erinも言っていたが、せっかく外国にいるのに、留学生が同じ国の出身で固まってしまいう例が多くあるようである。それを打破するきっかけにも、本プログラムはなっているのではないかと思う。

（インターンシップの成果）

インターンシップの後半には少しずつではあったが電

話を取ったり、学生に申請書類について確認の電話をかけたりできるようになった。常に冷や汗ものではあったが、これは私の中で大きな成果であると思う。やはりホストファミリーや語学学校の学生たちとは違って、ネイティブの学生たちは話すスピードが違うし、使っている単語も違う。そうした中で、仕事として英語を使うというのは、日常会話レベルの何倍もの力量が求められると改めて感じた。会話だけでなく、Emailの文章1つをとっても、（出す前に見てもらおうと）アメリカ人だったら使わない不自然な表現を使っていると指摘され、壁の大きさを感じた。それは勉強の積み重ねも大事だが、実践の中で初めて磨かれていくものだと強く感じた。仕事の質の面では正直不満が残ったが、実際会話力が向上したのはこの時期である。ホストファミリーに、「最近お前の発音が日本のアクセントが目立たなくなり、それらしくなってきた」と言われたのはその証明になると思う。それはまさしく学生への対応、またアドバイザーたち、学生アドバイザーたちとの仕事のやり取りで磨かれていたのだと思う。

（終わりに）

本研修により英語力は確実に伸びたと思う。ただ、実務的に使えるレベルになるには、まだまだ努力が必要だし、オンザジョブトレーニングが出来れば、もっとよくなっていくと思う。それだけに1年という期間は短い感があった。しかし同時に東京大学が国立大学法人化を迎え、ニュースを通して大きく変わっていく様子を見るのは正直焦りもあった。インターネット・メールが普及したとはいえ、やはり現場にいて仕事をしているのと、していないのとではずいぶん違う。情報収集には気を使ったつもりだったが、帰国後知ったのは大幅な人事異動と学内における変化であり、私は文字通り「浦島太郎」になっていた。

最後に本研修に関してお世話になった国際課の皆様、快く研修に送り出してくださり、研修中の事務を担当していただいた当時の学生部の方々、インターンシップ受入れをしていただいたUCSB EAPの関係者、その他本研修でお世話になった全ての方々にお礼申し上げ、本報告書の終わりとしていたい。



インターン先のオフィスにてアドバイザーたちと。右から2番目が飯塚研修生。1番左が受入れ担当のErin

イギリスでの長期海外研修を終えて

情報理工学系研究科企画室
長谷川敏子

(はじめに)

私は、東京大学職員海外研修（長期）プログラムにより、平成17年1月4日から平成17年6月29日までの約半年間、イギリスのコベントリーという街の近くに位置するウォーリック大学で語学研修を受けました。コベントリーはロンドンの北西、電車で1時間半ほどのところにあり、イギリス第二の都市バーミンガムにも比較的近い場所にあります。コベントリー自体は大きな街ですが、ウォーリック大学はそこからバスで20分ほどのところにあり、周辺は緑に囲まれたとても環境のよいところでした。春には菜の花畑が黄色く染まり、リスや鴨、白鳥などの動物たちも身近に見ることができました。

(授業)

今回の研修で、私はウォーリック大学のCELTE (Centre for English Language Teacher Education) という留学生のための英語学習センターで開設している Intensive Course in English というコースを受講しました。授業は1年を通して3学期ありましたが、研修期間の都合上、春学期と夏学期の2学期計20週を受講しました。コースは例年、academicコースとbusinessコースの2種類があったようですが、今年度は人数の関係からacademicコースのみでした。このコースは、主にこれからウォーリック大学の大学院に入学を希望する留学生がWELTというウォーリック大学に入るためのテスト対策及び入学前の準備段階として受講するというものでした。クラスメイトは、1学期と2学期目で顔ぶれは変わりましたが、2学期を通して10人弱で、国籍は中国からの留学生が半分を占め、そのほかはタイ、日本、台湾、イラン、ヨルダン、韓国など学生のほとんどがアジア圏の学生でした。年齢は20代から40代までと幅広かったですが、立場は同じ学生ということで年齢に関係なく対等につきあっていました。みなとてもフレンドリーで、勉強熱心でした。イギリスはやはり日本の大学と比べて留学生の割合が高く、ウォーリック大学でも多くの留学生が勉強しており、特にヨーロッパ圏以外では中国、インドからの留学生が多かったように思います。

授業は月曜日から金曜日まで毎日あり、月曜日から水曜日までが朝9時から夕方4時まで、木曜日と金曜日が朝10時から1時までで、speaking・listening、grammar、reading、writing、vocabulary、総合英語などの授業がありました。readingは毎回先生がピックアップした新聞記事を決められた時間内に読むという授業で、これは

わからない単語があっても辞書を見ず、短時間に長文を読んで内容を把握する訓練になりました。トピックはイギリスに関するものが多かったことから、イギリスについての知識を深めるよい機会でした。また、writingの授業では毎回essayの宿題がでましたが、日本語でも小論文などは得意なほうではないので、最初のうちはひとつのessayを3時間、4時間と時間をかけて書いていました。当たり前のことではありますが、writingでは、ある事柄について自分はどう思っているのか、どういう意見をもっているのか、まず英語云々よりも自分なりの意見を持っていないと何も書けないのだということを痛感しました。そういう意味で、writingの授業はいろいろな事柄に関して、自分の意見をつきつめて考えるいい機会になりました。また、ひとつの題について自分の意見を筋道立てて述べることはやはり難しく、writingは最後まで気の重い授業でしたが、数をこなしていくうちに次第に短時間である程度のこと書けるようになりました。このwritingの授業を通して、essayや論文などの文章の構成や適切な単語の使い方、論を発展させる方法など多くのことを学びました。vocabularyの授業では様々な単語やその使い方、単語のもつニュアンスなどを勉強しました。speaking・listeningの授業ではテープを聞いてノートをとったりビデオを見たり、あるトピックについて学生同士で議論したりしました。研修中、listeningが私にとっては一番難しく、listening力を高めることに重点をおきました。相手の言っていることがわからないと、コミュニケーションがうまく成り立たないからです。ただ、努力の割にはなかなか思うように上達できず、研修の最後の方になっても相手に何度か聞き返してしまうことがしばしばありました。また、2ターム目からはspeaking・listeningの授業に代わってpresentation skillという授業が加わり、この授業ではpresentationの時に使う言葉や間のとり方、態度などを学び、学生はそれぞれ1学期の中で2回ずつ発表を行いました。今まであまりpresentationなどをする機会がなかったことから、最初のうちは難しく感じましたがOHPなどの資料を使ったり、話題を移行するときにサインとなる言葉などを用いたり、聴いている人たちにいかにわかりやすく、また興味をもってもらおうかというこつを学ぶことができました。

全体を通して、授業中は、みな積極的に発言し、疑問点があればすぐに先生に聞くといった姿勢で、日本人は授業中に発言するときに恥ずかしいと感じて発言することをためらいがちですが、彼らはそのようなことは気にせず、どんどん自分の意見を述べていました。そのためどの授業も活気があり、次第に自分も慣れてきてわからないことがあれば、なるべくその時に先生に聞くように心がけました。

(授業以外の活動)

ウォーリック大学は古い大学の多いイギリスの中では、1965年創設の比較的新しい大学で、キャンパスの中にはスーパー、カフェテリア、グラウンド、スポーツ施設等があり、中でもアートセンターという映画館と劇場を備えた施設は規模も大きく、日本よりも手ごろな料金で映画や演劇を観ることができました。また、アートセンターは学生だけでなく周辺の住民にもよく開かれた施設であり、一般の人々もいろいろな演目を観にアートセンターを訪れていました。その他「スチューデントシネマ」として学生が主催する団体が学期中はほぼ毎日、大きな階段教室を使って比較的新しい映画を学生向けに上映していたので、英語の勉強にと何度か観にいきました。

私が通っていたコースでは各学期2回ずつエクスカージョンという日帰りの小旅行があり、ケンブリッジやオックスフォードなどを観光することができました。また、3月のイースター（復活祭）の時期に3日間だけHOSTというボランティアの機関をとおして一般の家庭でホームステイをすることができました。私がお世話になった家族はマンチェスターの少し南にあるストックポートという小さな町に住む50代の夫婦と犬が一匹のおうちでした。二人とも市の議員という少し特殊な環境でしたが、奥さんは敬虔なクリスチャンで、イースターの前日と当日、教会と一緒に連れて行ってもらい、日本ではあまり経験することのできないイースターの雰囲気を楽しむことができました。イースター当日の昼には伝統的な料理をご馳走になりました。イースターでは伝統的に、うさぎや卵が重要なアイテムとして使われており、デザートとしてチョコレートで作った大きな卵をもらいました。

他の活動としては、ウォーリック大学で知り合った日本人のご夫婦に地元のwalkingの会に誘っていただき、2回ほど参加しました。この会は毎週日曜日に田舎を歩くというもので、毎回4マイル（6キロ）、6マイル（9キロ）、10マイル（15キロ）という3つのコースがあり、1回目は4マイル、2回目は10マイルのコースに参加しました。日本でも1度に15キロも歩くことなどほとんどなかった私ですが、自然の風景を見て参加者とおしゃべりをしながら歩いていたら、なんとか歩ききることができました。参加者の多くは50歳以上で、すでに退職した人たちも多く、毎週このwalkingに参加している人がほとんどでした。みなとても元気で、美しい風景の中を歩くことを楽しんでいる様子がよく伺えました。イギリスには牧場や畑が多くありますが、その中を人が歩いてもよいフットパスという歩行者用の小道がいたるところにあります。イギリスには自然を楽しむという文化が深く根付いているように思いました。

(寮生活)

ウォーリックにいる間はキャンパス内にある寮で生活をしていました。キャンパス内には学部生、大学院生用にいくつか寮があり、私が住んでいた寮はひとつのフラットにつき8人の学生が住み、部屋はそれぞれ一人部屋ですが、ひとつのキッチンを共同で使うというものでした。最初は英語があまり話せずなかなかコミュニケーションがとりづらかったものの、思い切って話かけたりするうちに次第に打ち解けてきて、料理の話をしたり、一緒にご飯を食べたりするようになりました。国や宗教によってかなり食文化や習慣も違い、戸惑うこともありましたが、多様な文化を肌で感じるすることができました。彼らもまたとてもフレンドリーで、授業が終わってからの時間や休日を楽しみ過ごすことができました。

(最後に)

イギリスから帰国して1週間ほどたった7月7日にロンドンでテロが起き、研修中何度かロンドンに足を運んだこともあったことから、そのニュースを聞いて非常に衝撃を受けました。また、一緒に勉強した人たちの中にはこれからも引き続きイギリスで学ぶ友人も多く、とても心配になりました。いろいろな文化が共存しているイギリスですが（特にロンドンなど大都市）、この事件の後、外国人に対して閉鎖的になってしまうのではないかと少し心配です。もうこれ以上テロが起きないことを祈るばかりです。

この研修の間は、言葉が通じなかったり、習慣が違ったりして初めてのことや積極的に行動していかなければならないことが多かったことから、何事も自分から動かなければ始まらないということを実感し、これまでよりも少し積極的になれたように思います。そして、語学のクラスではアジア圏の留学生が多かったため、距離的には近いながらも、よく知っているとは言えなかった国の人々と知り合ったことで、それらの国々について少しではありますが理解を深めることができたと思います。また彼らとの交流をとおして、忙しい生活の中で忘れがちな、人を思いやることの大切さをあらためて感じました。イギリスの文化やイギリス人の物の考え方、そのほか様々な文化やいろいろな考え方があることを肌で感じることはできたのは、イギリスで勉強できたおかげだと思っています。

毎日の勉強は大変でしたが、授業を通じていろいろなことを学べるのが楽しくもあり、また、継続して努力することの大切さも痛感しました。イギリスに半年間行ったからといって、当初考えていたように不自由なく英語がしゃべれるようになったわけではなく、これまで勉強したことを忘れないためにも今後も引き続き勉強していきたいと思っています。半年間は本当にあっという間で

したが、日本を離れてみて、日本・日本人のよいところ、逆にこうした方がいいのではないかとというところを客観的に少しは理解できたように思います。外国の大学で半年間勉強し生活することで、英語の勉強だけでなく様々なことを経験することができ、それらは私の大きな糧となりました。この研修で得た知識や経験を忘れずに、今後の自分の職務に生かしていければと考えています。最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださったことを東大の関係者の方々、ウォーリック大学の担当者の方々に心より感謝いたします。本当にどうもありがとうございました。



寮の友人たちと。左端が長谷川研修生

なお、現在本制度で海外へ派遣されている事務職員は以下のとおりです。()内は派遣前所属部局。

平井 健太郎 (教養学部等事務部学生課学生係)

派遣先：カリフォルニア大学サンタクルーズ校
(米国)

派遣期間：平成17年3月22日～平成18年3月20日

事務職員の海外長期研修プログラムとしては以下のものがありますので、詳細については国際課研究活動支援チーム (内線22316) までお問合せください。

- ・東京大学国際交流担当職員海外研修 (長期)
- ・文部科学省国際教育交流担当職員長期研修プログラム
- ・日本学術振興会国際学術交流研修
- ・日本学術振興会研究連絡センター事務官派遣
- ・中国政府奨学金留学生 (行政官派遣)
- ・日墨研修生・学生等交流計画派遣生

【連載】

Flags

No.1

運 動 部 紹 介

総務部

総務部は各運動部の派遣協力の下、運動部の統括を行うとともに学部学生・大学院生・教職員に向けて各種講習会等を企画・実施して運動する場を提供しています。

<スポーティアをご存知ですか？>

東京大学の保健体育寮として海や山、高原に位置する5つのスポーティア。そこで7月末から8月末にかけての1ヶ月間、僕達はスタッフとしてお客様をお待ちしています。学生1泊1500円という安さと昔からの良き伝統を守るために多くの部から協力してもらい掃除や洗濯、皿洗いなどすべての仕事を行っています。また僕達にとっても部活動の傍ら他の部との交流が図れ、熱い友情が芽生える思い出の場所となっています。

<各種講習会、スポーツ大会>

その他にも運動会総務部では様々なスポーツ講習会やスポーツ大会を企画しています。講習会は各部指導のもと初めての方でも楽しみながら上達でき、少し変わったスポーツも体験できます。また総長杯サッカー大会では50チーム程が優勝をかけて争います。これらは年間を通じて開催しており、詳しい予定はP10の「掲示板」をご覧ください。

<Flagsスタート！>

今回から東京大学運動部紹介として『Flags』を掲載させていただくことになりました。“Flag”とは「旗」を意味し、各部の象徴をこの場で紹介させていただきます。また毎回2部ずつ全46部を紹介させていただくということで「旗」をつなぐという意味も込められています。今回は「ア式蹴球部(サッカー部)」と「漕艇部」が掲載予定です。これからどうぞよろしくお願ひします。

(東京大学運動会総務部委員長 佐藤洋平)



★★DATA★★

人数：男子26名 女子2名・・・総務部員募集中

活動場所：御殿下記念館モール街

年間予定(10月以降)：

伊豆・戸田マラソン

総長杯サッカー大会

総長杯御殿下記念館バレーボール大会

総長杯御殿下記念館バスケットボール大会

他、各種講習会

HP：http://www.undou-kai.com/

宇宙線研究所
中山成彬文部科学大臣、スーパーカミオカンデを視察

中山成彬文部科学大臣は、9月27日（火）、岐阜県神岡町にある宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子研究施設を視察されました。



入り口で鈴木所長の説明を受けられる中山大臣
 左から内山研究協力部長、桐野理事、中山大臣、
 芦立課長、松尾秘書官、鈴木所長

て何が分かってくるのか」など、熱心に質問されました。その後、神岡地下で展開されているいくつかの地下実験のうち、将来の重力波望遠鏡の試験機の実験現場をご覧になり、「なぜ望遠鏡が地下にあるのか」など、興味深く質問をされました。地下で行われているニュートリノなどの最先端の『宇宙観測』実験に理解を深められた視察でした。なお、大臣視察に際して、芦立訓学術機関課長、松尾浩道秘書官らが随行されました。



水槽上部から内部を覗かれる中山大臣
 左から松尾秘書官、中山大臣、桐野理事、鈴木所長

坑内では、桐野豊理事・副学長、鈴木洋一郎宇宙線研究所長、中畑雅行神岡宇宙素粒子研究施設教授らの歓迎を受け、鈴木所長から施設の概要説明を受けられたのち、スーパーカミオカンデ水槽の上面からパイプを通して水槽底部に設置してある光電子増倍管などをご覧になりました。



光電子増倍管の説明を受けられる中山大臣
 左から中山大臣、芦立課長、鈴木所長、桐野理事

コントロールルームでは、モニター上に映し出される観測状況を、若い研究者から説明を受け、「研究によっ

原稿募集

「学内広報」に学内の情報をお寄せください。

- ・文字数800字以内（写真がある場合は文字数を控えるにしてください。）
- ・写真には、キャプション（説明文）を必ず添えてください。
- ・原稿は電子データで下記まで、メールまたは学内便でお送りください。

送付先 東京大学総務部広報課

TEL：03-3811-3393 内線：22031、82032

FAX：03-3816-3913

E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

原稿の締切は各月第1・3水曜日、配付は翌々週の火曜日です。ただし、該当日が祝日の場合を除きます。

平成17年度の学内広報の発行スケジュール

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

コミュニケーションセンターだより No.5

■北海道演習林のコースター、ペン立てが入荷！

あの大学院農学生命科学研究科附属北海道演習林で育った木で創ったコースターとペン立てが入荷しました。

今回の樹種は、榎と胡桃の木です。榎の木は、やや硬くて重く、美しい木肌を持ちあわせです。ヨーロッパでは評価が高く、榎（ナラ）のことを「キング・オブ・ザ・フォレスト（森の王様）」と呼ぶそうです。

胡桃の材質は、非常に韌性に富んでいて、余り硬くもなく加工性がよく、材に油を染込ませて磨くとウォルナット調仕上と言う美しい艶が出る材料です。家具の仕上げ色としてウォルナットという言葉を目にすることもあるかと思えます。



ペン立て
(1個1,100円)
※ペンは別売り



コースター(榎・胡桃)
(2枚セット630円)

コースター150個、ペン立て200個の限定入荷なのでご希望の方は、お早めにお買求めください。

(担当：渉外本部 曾我)

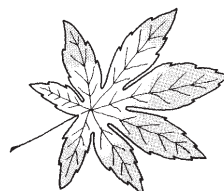
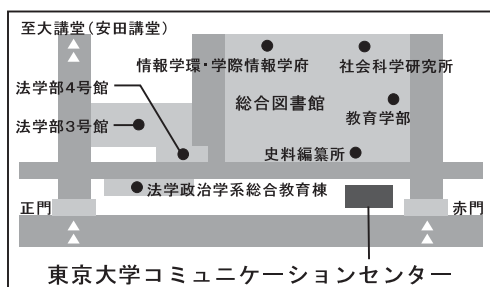


The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30
電話：03-5841-1039
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/utcc01_j.html

10月は、日曜・祝日もOPENいたします。
OPEN：11：00～17：30



総務部

ホームカミングデイ開催迫る！

お知らせ

ホームカミングデイが、来る11月19日(土)に、本郷・駒場の両キャンパスで開催されます。

今回で4回目を迎え、ますます企画内容も充実。各学部における講演会、懇親会、施設見学会といったイベントのほかにも、現役学生による本郷キャンパスツアーや音楽、寄席、スポーツと多種多彩の企画をご用意しています。また、安田講堂でのウェルカムセレモニーでは、映画監督吉田喜重氏、映画女優岡田茉莉子氏、映画評論家蓮實重彦氏(元総長)といった豪華キャストをお迎えして、日本映画の現在・過去そして未来を語っていただきます。

卒業生の方々はもちろんのこと、教職員、学生の方々におかれましても、ご家族・ご友人もお誘いあわせの上、ぜひお気軽にご来場ください。ホームカミングデイを通じて、旧友や恩師に再会したり、大きく変わりつつある大学を実際に見ていただき、東京大学の現在・過去そして未来をより身近に感じていただければ幸いです。

さらに今回、みなさまが近況報告や各種告知などにご活用いただけるよう、ホームページのご案内欄やオンライン掲示板をご用意しています。これを機会に同窓会などの開催を企画されてはいかがでしょうか。

詳細なイベント情報や申込方法については、「学友会ニュース第4号」(10月中旬発行)または学友会ホームページ(<http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/hcd.html>)でご案内しておりますので、どうぞご覧ください。なお、お問い合わせは総務部渉外グループ(03-5841-1216、内線21216)までお願いします。

学生部

スポーツ大会・講習会のお知らせ

お知らせ

東京大学運動会では、運動部の協力の下、様々なスポーツの大会や講習会を開催しています。これらの行事は、日頃の練習の成果を競う場として、もしくは運動部員の指導の元で技術を向上させる場として、あるいは経験したことのないスポーツに触れる機会として、多くの方々にご利用いただいています。

今回は、今年度中に開催される予定の行事をまとめてご案内します。皆様のご参加をお待ちしています。

●スケート講習会

真夜中にスケート場を借り切り、オールナイトで行う講習会です。スケート部員の全面協力の下、経験度別にグループ分けした上で丁寧に指導します。模範演技やゲームなども用意し、飽きさせない内容となっています。貸靴代や保険代まで含めて参加費が1,000円というのも大きな魅力です。

開催日：11月2日（水）夜中～3日（木）（祝日）早朝

場 所：高田馬場シチズンアイススケートリンク

参加費：1,000円（貸靴代、保険代など含む）

●バスケットボール大会

駒場第二体育館で一日中試合を行います。リーグ戦形式なので、一試合しかできないということはありません。例年、学内サークルや研究室内チームが多数参加しており、白熱した試合が展開されます。上位チームにはもちろん賞品を用意しています。仲間を募って、ぜひご参加ください。

開催日：11月6日（日）

場 所：駒場第二体育館

参加費：1人100円

●参加方法

参加申込は、本郷地区は御殿下記念館モール階運動会窓口、駒場地区はアドミニストレーション棟8番窓口（課外活動係）で受け付けています。窓口には、申込書や行事要綱が置いてあります。お気軽にお立ち寄りください。

●参加対象者

参加対象者は本学の学生・教職員です。なお、運動会員でない方には行事参加に伴い年会費（学生2,500円、教職員3,000円）をいただくことになります。その際お渡しする運動会員証は一年間有効ですので、ぜひ多くの行事にご参加ください。

●これから受付予定の行事

まだ受付は始まっていませんが、今後も様々な行事を予定しています。

各行事の詳しい情報は、HP（<http://www.undou-kai.com/>）や構内の掲示板に貼られるポスターなどをご覧ください。学内広報でも随時お知らせしていく予定です。

行 事	開 催 日
ダンス講習会	11月27日（日）
馬術講習会	12月3日（土）・4日（日）
水上運動会（ボート）	12月10日（土）
ボウリング講習会	未定

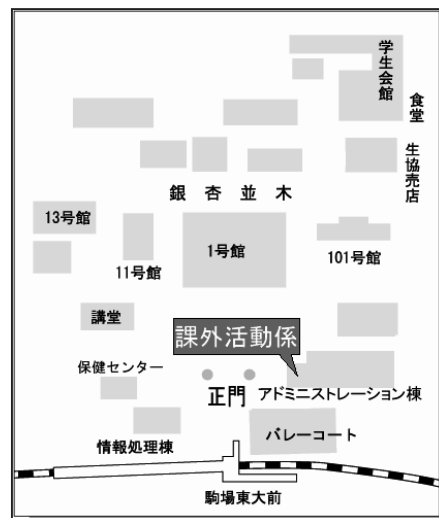
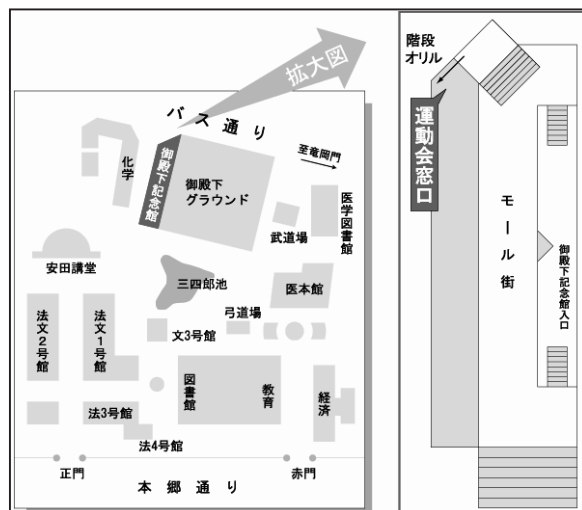
●問い合わせ先

東京大学運動会総務部

H P： <http://www.undou-kai.com/>

TEL：03-5841-2510

E-mail： undoukai@undou-kai.com



大学院理学系研究科・理学部、素粒子物理国際研究センター

「楽しむ科学コンクール」の創設（一理学分野の教育・研究試行プロジェクトの公募）

募集

このたび、大学院理学系研究科及び素粒子物理国際研究センター並びに財団法人平成基礎科学財団を実施母体として、「楽しむ科学コンクール」を創設することになり、小宮山宏総長、小柴昌俊特別荣誉教授（財団法人平成基礎科学財団理事長）、酒井英行理学系研究科副研究科長、駒宮幸男素粒子物理国際研究センター長が出席して10月5日（水）記者発表を行いました。



小柴 昌俊
特別荣誉教授

科学の探究は極めれば極めるほど深奥なものです。また、科学は意外性に満ちあふれています。基礎科学はその宝庫です。この醍醐味を是非、多くの方々に体感していただきたい。これが新たにはじまる「楽しむ科学コンクール」創設の動機です。

このコンクールは、基礎科学分野への興味と関心を高めるため、特に広い意味の理学分野の試行してみたい研究プロジェクトまたは教育プロジェクトを公募するものです。採択されたプロジェクトには、実施費用（上限100万円）を東京大学から支給し、優秀な研究・教育に対しては平成基礎科学財団が顕彰します。

プロジェクトの代表者が20歳以上であることが応募資格です。一人で行う研究・教育でも、複数人数のチームで行う研究・教育でもかまいません。代表者が研究・教育分野の専門家であったり、学位をもっている必要はありません。

東京大学の奨学寄附金を使用して、研究及び教育のプロジェクトを一般の方々を対象に広く公募し、実施することは、初の試みです。



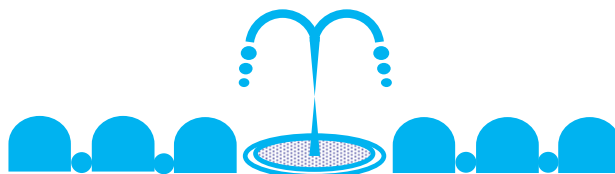
小宮山 宏 総長

- 素粒子物理国際研究センターHP
<http://www.icepp.s.u-tokyo.ac.jp>
- 平成基礎科学財団HP
<http://www.hfbs.or.jp>



記者会見の様子

多くの方々が、本プロジェクトに応募してくださることを期待しています。



「噴水」のコーナーにご意見を！！

「学内広報」には、みなさんから投書を寄せていただくコーナーとして「噴水」が設けられています。

本学における教育・研究活動等に関する意見等をお寄せください。広報委員会が適当とするものを、適宜、掲載します。

[原稿の送付先]
東京大学総務部広報課
MAIL: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

[お問い合わせ]
TEL: 03-3811-3393 内線: 22031、82032

詳細は、ホームページをご覧ください。

- 大学院理学系研究科HP
http://www.s.u-tokyo.ac.jp/index-ja_ip.html

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第486(10月12日)号の発行 —教員による、学生のための学内新聞—

お知らせ

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第486(10月12日)号の内容は以下のとおりとなっていますので、ご覧ください。

教務委員会：あなたを助けるUTask-Web いよいよ利用開始

高橋哲哉：靖国問題のゆくえ

山本 泰：「教養教育開発機構」って何？

木村秀雄：18号館（総合研究棟）建設の経緯

里見大作：進学情報センターの楽しみ方

〈本の棚〉

佐藤俊樹：今橋映子編著『リーディングズ 都市と郊外 比較文化論への通路』

神野志隆光：三谷博編『東アジアの公論形成』

山内昌之：白井隆一郎著『榎本武揚から世界史が見える』

〈時に沿って〉

西川杉子：ボックスとブーツ

村上郁也：二年周期

大学院総合文化研究科・教養学部

「form_raum_idee—デッサウのバウハウスとハレのブルク・ギービヒェンシュタイン美術デザイン大学、世界の現代デザインを切り開いた二つの美学校—」開催

お知らせ

ドイツのデッサウで1923年から1932年まで活動したバウハウスが、その短期間に、建築のみならずデザインと工芸の分野に新時代を切り開いた衝撃は、21世紀を迎えた今も、なお持続しています。けっして古びることのないデザインが生まれた秘密を巡って、世界中でいまも謎解きの議論が続けられています。

東京大学総合文化研究科とザクセン=アンハルト州文

化省は、「日本におけるドイツ2005/6」の関連行事として、20世紀前半の造形デザインに時代を画した二つの美学校、デッサウのバウハウスとハレのブルク・ギービヒェンシュタインを紹介する展覧会「form_raum_idee」を開催します。本展では、二つの美学校のたどった歴史、そして復活して現在も活動を続けるデッサウ・バウハウス財団とブルク・ギービヒェンシュタイン美術デザイン大学の現在の活動を伝えます。

デッサウ・バウハウス財団の全面的な協力のもと、映像、模型、メディア・インスタレーション、歴史的オブジェおよび同時代のオブジェを駆使して、バウハウスのエッセンスを展示します。またバウハウスとほぼ同時期に、デッサウの近くの伝統ある町ハレに設立され、バウハウスの教授陣と活発な交流を持ったばかりか、工房中心の教育という理念をバウハウスと同じくするブルク・ギービヒェンシュタイン美術デザイン大学の活動とその成果が、バウハウスのいわば合わせ鏡として展示されます。

なお、展覧会の会期冒頭に現在におけるバウハウスの活動と世界における存在意義を解き明かす試みとして2部構成のシンポジウムを行います。

展 覧 会

会場：駒場博物館

会期：10月29日（土）～12月9日（金）（月曜休館）

時間：10:00～18:00

展示内容：

〈デッサウ・バウハウス・コーナー〉

- ・ディレクター（所長）およびマイスター（教師）の紹介パネル
- ・マイスターハウスとバウハウスの建築模型・建築図面等の展示
- ・プロダクトデザインおよびグラフィックの展示
- ・バウハウス・マイスターの作品の展示
- ・現在行われているバウハウスの活動の紹介（都市計画・舞台芸術・都市再生）
- ・ビデオラウンジ（バウハウスのスツール椅子を展示使用）

〈ブルク・ギービヒェンシュタイン

美術デザイン大学コーナー〉

- ・本のデザイン
- ・テキスタイルの展示
- ・ビデオラウンジ（ギービヒェンシュタインのスツールを展示：雑誌PENで紹介）

注）バウハウス関係の展示物はすべてデッサウ・バウハウス財団が今回の展覧会用に構成し、東京大学に運び、

現地で組み立てます。展示そのものが、バウハウスのデザインを体現するものとなります。

そのほか、パウル・クレー協会の協力により、バウハウスのマイスターであったパウル・クレーとヴァシーリー・カンディンスキーの版画を展示します。

シンポジウム

会場：駒場キャンパス18号館ホール

日時：10月29日（土）10:30～18:30

テーマ：「バウハウスと都市」

プログラム：

司会：池田信雄/ アネッテ・ツェンター

<1部>現代の生活をデザインする

講師：総合文化研究科教授 加藤道夫
総合文化研究科助教授 田中 純
デッサウ・バウハウス財団
ヴォルフガング・テーナー
デッサウ・バウハウス財団
トルステン・ブルーメ

<2部>縮みゆく都市のデザインと計画

講師：新領域創成科学研究科教授 大野秀敏
生産技術研究所助教授 曲渕英邦
デッサウ・バウハウス財団
ヴァルター・プリッゲ
デッサウ・バウハウス財団
レギーナ・ゾンアーベント

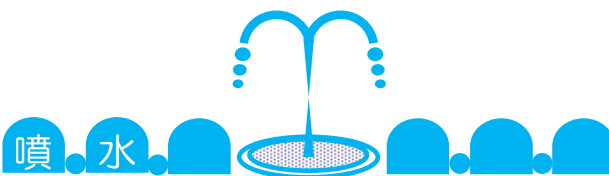
主催：東京大学総合文化研究科・教養学部駒場博物館バウハウス展企画準備委員会
ザクセン＝アンハルト州文化省
デッサウ・バウハウス財団
ブルク・ギービヒェンシュタイン美術デザイン大学

協賛：鹿島建設・ウィルクハーン・ジャパン
博報堂インプログレス（アドバイザー）

後援：ドイツ連邦共和国大使館・東京ドイツ文化センター・ドイツ学術交流会（DAAD）
東京大学ドイツ・ヨーロッパセンター（DESK）

問い合わせ先：

大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館
住所：〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1
電話：03-5454-6139
Fax：03-5454-4929



理学部1号館にコーヒーショップがオープン！

9月28日（水）、理学部1号館に「ドトールコーヒーショップ東京大学安田講堂前店」がオープンした。このコーヒーショップは学生、教職員の交流の場として、リフレッシュの場として、また、教職員の打合わせ等に、その利用が期待され、理学系研究科・理学部として待望久しいものであった。今後、会議のコーヒープレイク用の配達も予定している。店内外に54席があり、平日は8:30から19:00まで、土曜日は9:00から19:00まで利用することができる。



学生や教職員向けに『街中にある店舗をそのまま東京大学の中に』というコンセプトのもとに、本格的なコーヒーショップがオープンしたのは初めて。

オープン当日の朝は8:30の開店を待つ長い行列ができるという盛況ぶりであった。初日の来店者数は延べ600名余りで、そのうちテイクアウトをしていく人が約半数であった。統計の結果、10時、11時台が比較的すいているので、混雑を避けたい方にはその時間帯の来店をお勧めしたい。



理学部1号館周辺は、今年4月のコンビニエンスストア、今回のコーヒーショップのオープンで、民間企業による新しい風を感じる中心となった。

（理学系研究科）

史料編纂所

史料展示会「東京大学の国宝・重文名品展」開催

お知らせ

11月18日（金）19日（土）の両日、史料編纂所では国宝・重要文化財に指定された史料を中心とする史料展示会を、史料編纂所二階で開催します。

史料展示会は、第36回目となりますが、今回はホームカミングデイにあわせて日程を設定しました。

史料編纂所には、研究や史料編纂業務の上で必要な古文書・古記録・絵図・絵巻・版本などが多数所蔵されています。史料蒐集を意識的に行ったわけではありませんが、所蔵者の御厚意で御寄贈を受けたり、破格の廉価で購入したりしているうちに、国宝1件、重要文化財13件を数えるまでになりました。

こうした史料は学界の共有財産であり、史料を翻刻するほかに、原本の形状そのものをより多くの研究者に公開することが望まれます。そのため史料編纂所では、古文書原本を高精細な印刷で出版する『東京大学史料編纂所影印叢書』を発刊する運びとなりました。今回の展示会では、この企画を記念して、叢書に収録する貴重史料を出品します。

国宝である島津家文書からは、鎌倉幕府初代將軍源頼朝や執権北条時政らの文書を貼り付けた『歴代龜鑑』二帖、安政大地震の被害を物語る『江戸大地震図巻』などを展示します。重要文化財からは、平安末期の左大臣藤原頼長の日記『台記』、『江戸幕府儒官林家関係資料』など4点を展示するほか、それに匹敵する歴史史料の名品の数々を展示します。また、高松宮家から譲渡された「御湯殿上の日記」、新規購入史料である「薩摩藩奥女中文書」なども、この機会に初めて公開します。

御来場の方には、くわしい解説図録を無料で贈呈します。是非、史料編纂所を訪ねいただき、古文書の語る世界に足を踏み入れてください。

総合研究博物館

公開講座「標本は語る—自然の体系を目指して」開催

シンポジウム・講演会

総合研究博物館では、ご好評により昨年度より引き続き開催しています『Systema Naturae—標本は語る。』展に関連した公開講座「標本は語る—自然の体系を目指して」を下記のとおり開催します。

本講座では、主として展示を担当した専門家が標本とその背景、標本からわかること、標本を収集することの意義などについて語ります。

- 期 間：11月28日（月）～12月2日（金）
- 時 間：15:00～17:00（全5回10時間）
- 会 場：総合研究博物館・展示ルーム内講義室
- 受講料：5,000円

●定 員：60名

●総合担当教員

大場秀章（総合研究博物館・教授）

●講義内容・講師

第1回 11月28日（月）「『自然の体系』とその意義」
総合研究博物館・教授 大場秀章

第2回 11月29日（火）「鉱物をめぐる自然の体系」
総合研究博物館・教授 田賀井篤平

第3回 11月30日（水）「魚類をめぐる自然の体系」
おさかな普及センター資料館・館長 坂本一男

第4回 12月1日（木）「貝類をめぐる自然の体系」
総合研究博物館・助手 佐々木猛智

第5回 12月2日（金）「哺乳類をめぐる自然の体系」
総合研究博物館・助教授 高槻成紀

●応募方法

郵送またはHPからお申込みください。

<郵送>

往復はがきに以下の事項を明記の上、郵送にてお申し込みください。受講料の納入方法等については返信葉書にてお知らせいたします。なお応募者が定員を超えた場合抽選とさせていただきます。

（往信部分）①講座名、②郵便番号・住所・氏名、
③電話番号、④年齢、⑤職業

（返信部分）①返信先の郵便番号、②住所、③氏名
・応募締切 11月5日（土） 当日消印有効

・郵送先

〒113-0033東京都文京区本郷7-3-1

東京大学総合研究博物館 事務室 公開講座 宛

<HPから>

下記アドレスのページからお申込みください。

<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/real/koukai/2005natu-rae/>

●問い合わせ

ハローダイヤル：03-5777-8600

HPアドレス <http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>

総合研究博物館

特別展示『ディオニュソスとペプロフォロス—東京大学ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査の一成果』展

お知らせ

10月15日（土）から11月13日（日）まで、総合研究博物館新館で特別展示『ディオニュソスとペプロフォロス

—東京大学ソマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査の一成果』展を開催します。また旧館では常設展示『Systema naturae—標本は語る。』展を引き続き開催し、2F展示ルームでは新規収蔵展示『重井陸夫博士コレクション ウニの分類学』展を同時開催します。

この展覧会は、本学の海外学術調査隊がイタリアのナポリ近郊ソマ・ヴェスヴィアーナ市のローマ時代遺跡「アウグストゥスの別荘」（通称）で発掘したローマ時代の彫刻二体—「ディオニュソス」と「ペプロフォロス」—が、愛知万博に出品するため、イタリア政府の特別の計らいにより国内に招来されている機会を利用して、ソマでの東大調査隊の発掘成果の一端を学内外に広く紹介しようとするものです。

この二体の彫刻を東京一円で一般に公開するのは初めてであり、また、きわめて貴重な古代遺産であるため、今後二度とイタリア国外へ貸し出しされる可能性がないと考えられます。

貴重な古代の遺産を展示するというだけでなく、学内での研究成果を社会一般に向けて公開することは、まさに総合研究博物館の使命そのものでもあり、本学全体にとって非常に意義深い展覧会になるに違いありません。



ディオニュソス



ペプロフォロス

- ◆特別展示『ディオニュソスとペプロフォロス—東京大学ソマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査の一成果』展
- ◆新規収蔵展示『重井陸夫博士コレクション ウニの分類学』展
- ◆常設展示『Systema naturae—標本は語る。』展

- 会 期：10月15日（土）～11月13日（日）
- 休館日：月曜日
（月曜日が祝日の場合は開館し翌日休館）
- 開館時間：10:00～17:00（入館は16:30まで）
- 会 場：総合研究博物館
- 入場料：無料
- 問い合わせ：
ハローダイヤル：03-5777-8600
HPアドレス <http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>

企画：西野嘉章（総合研究博物館教授）、
青柳正規（元本学教授、現国立西洋美術館館長）
後援：イタリア文化財省、ナポリ・カセルタ考古文化財
監督局、イタリア文化会館（東京）

情報基盤センター

SciFinder Scholarユーザトレーニングのお知らせ

お知らせ

情報基盤センターでは、SciFinder Scholarのユーザトレーニングを開催します。

SciFinder Scholarは化学・医薬・生化学等の雑誌論文や特許論文、化学物質情報、化学反応情報などの情報群を包括的に利用できるオンライン検索サービスです。

8月末に新バージョンである SciFinder Scholar 2006 (Windows版) がリリースされ、構造検索の強化など新機能が追加されました。

これからSciFinder Scholarを利用したいとお考えの方も、すでにヘビーユーザの方も、化学情報を必要とする皆様のご参加をお待ちしています。

- 日時：11月8日（火）13:30～15:00
- 会場：総合図書館1階 講習会コーナー
- 講師：社団法人化学情報協会 情報事業部
上野 京子 氏

●申込方法

受講ご希望の方（本学所属の方に限ります）は、以下のサイト内の申込みフォームにてお申し込みください。

<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/news/Sci2005.html>

申込み受付後、学術情報リテラシー係より受講確認のメールを送付します。

なお、定員（12名）に達し次第、締め切らせていただきますのでご了承ください。

●参考サイト

- ・SciFinder Scholar 2006 セットアップ手順
Windows 版（情報基盤センター図書館情報係）
http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/manual/SFS/index_win.html
- ・SciFinder Scholar 2006 リリースのお知らせ
（化学情報協会）
<http://www.jaici.or.jp/news/news050814.htm>

●問い合わせ先

情報基盤センター学術情報リテラシー係
内線：22649
E-mail: literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

情報基盤センター

データベース定期講習会のお知らせ

お知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、下記のとおりデータベース定期講習会を実施します。

本学にご所属であればどなたでも参加できます。どうぞお気軽にご参加ください。

また、ネイティブスピーカーの講師による英語編も好評実施中です。英語編のスケジュールは決まり次第下記の講習会ホームページでお知らせします。

●会場：総合図書館 1階 講習会コーナー

●定員：12名（先着順。予約不要です。会場に直接お越しください。）

●各コースの内容

<30分コース>

目的ごとにどんなデータベースがあるかを知りたい方、短時間で知識を得たい方には、こちらがおすすめです。

- ◆本をさがす編
- ◆雑誌をさがす編
- ◆新聞をさがす編
- ◆統計をさがす編

<1時間コース>

特定のデータベースについての解説や、検索実習が中心の講習を受けたい方には、こちらがおすすめです。

- ◆OPAC入門編
- ◆FELIX編
- ◆Web of Science編
- ◆電子ジャーナル編

詳細は、講習会ホームページをご覧ください。テキストもご覧いただけます。

(HPアドレス

<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/koshukai/>)

●10月後半～12月のスケジュール

月	火	水	木	金
10/17	10/18	10/19 11:00-12:00 電子 ジャーナル	10/20 15:00-15:30 新聞を さがす	10/21
10/24	10/25 15:00-16:00 OPAC入門	10/26 17:00-17:30 統計を さがす	10/27	10/28
10/31	11/1	11/2	11/3	11/4 15:00-16:00 FELIX
11/7	11/8 17:00-17:30 本を さがす	11/9 15:00-16:00 Web of Science	11/10	11/11
11/14 15:00-15:30 雑誌を さがす	11/15	11/16 11:00-12:00 電子 ジャーナル	11/17	11/18
11/21 11:00-12:00 OPAC入門	11/22	11/23	11/24	11/25
11/28	11/29	11/30	12/1 11:00-12:00 FELIX	12/2 17:00-17:30 新聞を さがす
12/5	12/6 11:00-12:00 Web of Science	12/7	12/8 15:00-15:30 統計を さがす	12/9
12/12 17:00-18:00 電子 ジャーナル	12/13	12/14 15:00-15:30 本を さがす	12/15	12/16
12/19	12/20 15:00-15:30 雑誌を さがす	12/21	12/22	12/23

●問い合わせ先

情報基盤センター学術情報リテラシー係

内線：22649

E-mail：literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

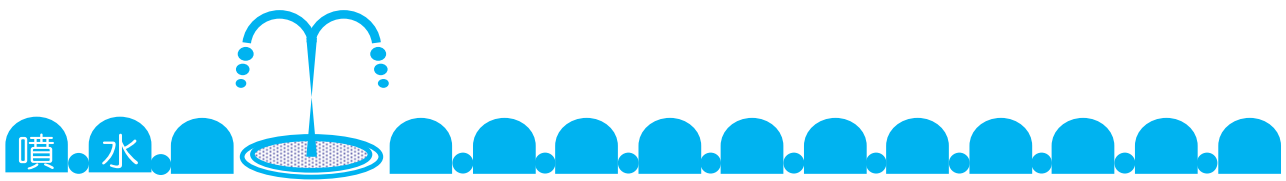


人事異動（教員）

発令年月日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
17.9.30	江藤文夫	辞 職（国立身体障害者リハビリテーションセンター病院長）	大学院医学系研究科教授
//	茂木立志	辞 職	大学院理学系研究科助教授
//	滝田佳子	辞 職（独立行政法人大学評価・学位授与機構教授）	大学院総合文化研究科教授
//	LUCORE SANDRA KATHLEEN	辞 職	大学院総合文化研究科助教授
//	安藤英幸	辞 職	大学院新領域創成科学研究科助教授
//	重松スティーヴン	辞 職	留学生センター助教授
（採 用）			
17.10.1	銭 志熙	大学院人文社会系研究科教授	
//	佐藤 薫	大学院理学系研究科教授	大学共同利用機関法人情報・システム研究機構 国立極地研究所研究教育系助教授
//	塚谷裕一	大学院理学系研究科教授	大学共同利用機関法人自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター助教授
//	井上 健	大学院総合文化研究科教授	東京工業大学外国語研究教育センター教授
//	OSWALD Dagmar	教養学部附属教養教育開発機構助教授	
//	岡田 猛	大学院教育学研究科助教授	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授
//	影浦 峡	大学院教育学研究科助教授	大学共同利用機関法人情報・システム研究機構 国立情報学研究所人間・社会情報研究系助教授
//	澤田康文	大学院薬学系研究科教授	大学院薬学系研究科寄付講座教員（客員教授）
//	牧野和久	大学院情報理工学系研究科助教授	大阪大学大学院基礎工学研究科助教授
//	武田裕子	医学教育国際協力研究センター 助教授	琉球大学医学部附属病院講師
（昇 任）			
17.10.1	浦野泰照	大学院薬学系研究科助教授	大学院薬学系研究科助手
//	古川 勝	大学院新領域創成科学研究科助教授	大学院新領域創成科学研究科助手
//	佐藤岩夫	社会科学研究所教授	社会科学研究所助教授
（配 置 換）			
17.10.1	岩澤雄司	大学院法学政治学研究科教授	大学院総合文化研究科教授
//	森田一樹	生産技術研究所助教授	大学院工学系研究科助教授
（兼 務 免）			
17.10.1	武内和彦	アジア生物資源環境研究センター長	大学院農学生命科学研究科教授
（兼 務 命）			
17.10.1	植田和男	大学院経済学研究科長 経済学部長	大学院経済学研究科教授

発令年月日	氏名	異動内容	旧(現)職等
17.10.1	山本正幸	遺伝子実験施設長	大学院理学系研究科教授
//	寛月岱造	アジア生物資源環境研究センター長	大学院農学生命科学研究科教授
(出 向)			
17.10.1	河合正弘	アジア開発銀行(地域経済統合室長 及び地域経済統合に関する総裁特別 顧問)	社会科学研究所教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。
 東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。



附属中等教育学校で银杏祭開催

中野区にある教育学部附属中等教育学校で、9月16日(金)から3日間で银杏祭が開催された。

本校の银杏祭(文化祭)の大きな特徴は、すべての企画、運営を基本的に生徒が行っていることである。また、装飾、展示、運営とその形はさまざまであっても、1年生から6年生まですべての生徒が何らかの形で银杏祭に携わることも特徴の1つである。

まず16日にルネこだいらで開会式が行われた。内容は管弦楽部の演奏、演劇、生徒会劇、3・4年生の課題別学習の発表、有志によるバンド、ダンスなどであった。12時半から16時半までステージ発表があり、全校生徒、教員、保護者が拍手をおくった。



ルネこだいらで行われた開会式の様子

続いて17日、18日は中野区の校舎で、総合学習の発表、展示、模擬店、ゲーム、演劇、管弦楽の演奏などが行われた。同時に受検希望者に対する学校説明会が開かれ、多数の小学生と保護者が大教室に詰め掛けた。



1年半取り組んだ卒業研究の発表の様子

また両日の夕方には体育館で中夜祭、後夜祭も開かれ、文化部や発表団体の展示・発表が良かった団体を来校者に投票してもらって決める各部門のグランプリが発表された。

今年度の银杏祭実行委員長の吉原紀君に银杏祭前日に話を聞いた。彼は昨年度も実行委員会の幹部として银杏祭に参加しているが、その時点ですでに「5年生(高2)になったら実行委員長をやろう」と決心したそうだ。実行委員会を組織するために、幹部をやりたい生徒たちを集めてグループで立候補して、生徒会幹部との面接を経て今年3月に就任が正式決定した。今年度は例年より银杏祭が1ヶ月早くなったことから、5月の体育祭が終了すると同時に活動を開始した。今年のテーマは「東大車輪」。「東大」と「大車輪」という言葉を掛けた。「みんなに頑張って!とアピールしたい」という気持ちから設定した。「特に今年心がけたことは?」との問いに対して「银杏祭は内部の人が楽しいのは当たり前。でも今年は自己満足に終わらないよう、内部の人も外部の人も楽しめる文化祭を目指しました。」と答えた。

(教育学部附属中等教育学校 松村厚子)

EVENT INFO

行事名	日時	場所	連絡先・HP等
富士演習林80周年記念行事 ※1320号参照	10/19 (水) ～24 (土)	富士演習林	富士演習林 0555-62-0012 http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/fuji/news/80years.html
教育測定・カリキュラム開発講座公開研究会 「ComputerizedTesting～理論と応用」	10月20日 (木) 15:00～	赤門総合研究棟A200講義室	大学院教育学研究科教育測定・カリキュラム開発講座 Mail : sokutei@p.u-tokyo.ac.jp http://www.p.u-tokyo.ac.jp/sokutei/sympo.html
情報基盤センター インパクトファクターセミナー ※1320号参照	10月20日 (木) 15:00～	総合図書館3F大会議室	情報基盤センター学術情報リテラシー係 03-5841-2649 Mail : literacy@lib.u-tokyo.ac.jp http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/news/IF2005
第14回HSPセミナー「日本の難民認定とロヒンギャ難民 (ミャンマ (ビルマ) の少数民族 (イスラム教徒))	10月20日 (木) 15:15～16:45	駒場キャンパス18号館4階コラ ボレーションルーム1	大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム事務 局 03-5454-4930 http://human-security.c.u-tokyo.ac.jp/seminars/HSP- seminars.htm
数理科学研究科談話会	10月20日 (木) 16:30～	数理科学研究科棟117号室	大学院数理科学研究科 http://faculty.ms.u- tokyo.ac.jp/seminar/colloquium.html
第15回HSPセミナー 「平和構築における移行期正義の展望と課題」	10月21日 (金) 13:30-15:00	駒場キャンパス情報教育棟 (m)	大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム事務 局 03-5454-4930 http://human-security.c.u-tokyo.ac.jp/seminars/HSP- seminars.htm
大学院入試説明会 文系各専攻及び「人間の安全保障」プログラム	10月22日 (土)	教養学部 (駒場キャンパス)	教務課総合文化大学院係 http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/kyomu/
留学生のための地震防災セミナー	英語コース 10月22日(土)、29日(土) 日本語コース 11月12日(土)、19日(土)	地震研究所	地震研究所 http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/yamaoka/eqseminar/
社研人材ビジネス研究寄付研究部門 成果報告会シン ポジウム	10月24日 (月) 15:00～	山上会館	社会科学研究所人材ビジネス研究寄付研究部門 http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/jinzai/
第3回レーザーアライアンスシンポジウム ※1320号参照	10月25日 (火) 13:10～	武田先端知ビル武田ホール	大学院工学系研究科・工学部 03-5841-6009
第27回ビジネスローセンター公開講座 「財産開示手続の創設と間接強制の拡大ー最近の民事 執行法の改正からー」	10月27日 (木) 15:00～	法学部25番教室 (法文1号館2 階)	東京大学ビジネスローセンター (BLC) http://www.j.u-tokyo.ac.jp/blc/openseminar.html
2005年度第7回産学連携セミナー 「新しい共同研究のありかたを求めてー Proprius21の実践」	10月28日 (金) 17:00～	産学連携プラザ2階会議室	研究協力部産学連携課 03-5841-2857 http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/ss/seminar/index.html
第1回技術職員等による駒場キャンパス技術発表会 ※1320号参照	10月27日 (木) 10:00～	生産技術研究所大会議室	第1回駒場キャンパス技術発表会実行委員会 実行委員長 高間信行 (生産技術研究所第2部) 03-5452-6685Mail : nob@iis.u-tokyo.ac.jp
数理科学研究科談話会	10月28日 (金) 16:30～	数理科学研究科棟117号室	大学院数理科学研究科 http://faculty.ms.u- tokyo.ac.jp/seminar/colloquium.html
スケート講習会 ※10ページ参照	11月2日 (水) 夜中 ～3日 (木) (祝日) 早朝	高田馬場シチズンアイススケ ートリンク	東京大学運動会総務部 03-5841-2510 http://www.undou-kai.com/
2005年度数学公開講座「社会や自然のなかの解析学」	11月5日 (土) 13:30～	数理科学研究科大講義室	数理科学研究科・21世紀COEプログラム「科学技術への 数学新展開拠点」Mail : funaki@ms.u-tokyo.ac.jp http://faculty.ms.u- tokyo.ac.jp/users/kokaikoz/kokaikoz2005.html
バスケットボール大会 ※10ページ参照	11月6日 (日)	駒場第二体育館	東京大学運動会総務部 03-5841-2510 http://www.undou-kai.com/
行事名	開催期間	場所	連絡先・HP等
常設展「よみがえる幕末明治の人々」 ※学内広報1317号参照	7月～10月	総合図書館3階ロビー	総合図書館 03-5841-2646 (音声案内) http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/josetsu/
21世紀COEものづくり経営研究センター 「ものづくり寄席」	10月～3月	三菱ビルコンファレンススクエ アエムプラス (東京駅丸の内南 口)	ものづくり経営研究センター 03-5841-2272 http://www.ut-mmrc.jp/topics/yose.html
公開講座「高校生のための金曜特別講座」(冬学期) ※1319号参照	10月14日 (金) ～2月10日 (金)	教養学部11号館2階1106教室	教養学部社会連携委員会「公開講座」担当係 03-5454-6637 http://www.c.u- tokyo.ac.jp/jpn/kyoyo/koukai2005winter.html
「ディオニュソスとペロフォロスー東京大学ソマ ・ヴェスヴィアーナ発掘調査の一成果」展	10月15日 (土) ～11月13日 (日)	総合研究博物館本館	総合研究博物館 ハローダイヤル 03-5777-8600 http://www.um.u-tokyo.ac.jp
「重井陸夫博士コレクションウニの分類学」展	10月15日 (土) ～4月16日 (日)	総合研究博物館本館	総合研究博物館 ハローダイヤル 03-5777-8600 http://www.um.u-tokyo.ac.jp
東大病院第8回食事療法展 「はじめませんか？食事改革」	10月24日 (月) ～10月28日 (金)	東大病院入院棟A1階レセプシ ョンルーム	東京大学医学部附属病院栄養管理室 03-5800-8637 http://www.h.u-tokyo.ac.jp/news/news.php?newsid=93
展覧会「form_raum_ideeーデッサウのパウハウスとハ レのフルク・ギョービヒエンシュタイン美術デザイン大 学、世界の現代デザインを切り開いた二つの美学校ー」 ※12～13ページ参照	10月29日 (土) ～12月9日 (金)	駒場博物館	大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館 03-5454-6139

若手研究者独立支援人事制度の創設を

国立大学法人化に伴う変革についての是非には枚挙に暇が無いが、新しい方向に向かっているという点では評価すべきであろう。しかし日本全体が期待している大学像と実際の教育研究活動を考えると、果たして東大が次世代に、夢を持った国際的な将来像を抱かせることができるかどうか、一教官としてためらいが生じてしまう。

生物医学系では、国立大学法人化に伴う目標である産学連携で、全米で最も成功している西海岸の有力大学を訪問する度に、大学としての実力差を見せつけられる。まず一番目は建物施設である。これは決してスペースの狭隘さを意味しないし、日本並に狭く混雑しているラボも多々見受けられる。米国ラボの特徴は、物理的空間の配慮でなく知的空間のそれである。例えば建物の中には知的興味や芸術的感性を刺激するオブジェや空間が配置されている。

第二に挙げられるのは、建物或いは部局・部門全体の弾力的な運営である。基礎生物・医学

領域では、コアとなる大型機器や動物舎に加えて研究補助員が必須である。日本では通常各々のラボに人員施設が配置され、部局・部門全体での管理運営は稀である。この点でも効率化・合理化の大きな遅れを感じている。

しかしこれらの研究環境以上に学ぶべき第三の点は、若手研究者の人事システムであろう。米国では有望な若手を抜擢・独立させ、更にラボ開設資金まで準備している。三～五年後に継続という最も厳しい関門が待っていても、若い才能を花咲かせる最短の方法である。本邦でもようやくポストク一人計画が打ち出されたが、その後の人材受け皿が大学に無ければ、若く優秀な頭脳の大学外流出に歯止めがかからない。現時点では最初の二点は早急に改善できなくても、特任教官創出で緒をつけた第三の点は直ちに実行できよう。分生研のような小部局こそ、第二点を加えて、このような制度を試験的に実施することで、大学全体の方向性の一つを示せるのではないかと思っている。

加藤 茂明 (分子細胞生物学研究所)



(淡青評論は、学内の職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1321 2005年10月12日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務部広報課 ☎ 03-3811-3393
e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
ホームページ http://www.u-tokyo.ac.jp/index_j.html

